



日本ラテンアメリカ学会 会 報



AJEL

2006年11月20日

AJEL

No. 91

1. 理事会報告

○第117回理事会

2. 第28回定期大会開催について
3. 研究部会開催のお知らせ
4. 学術交流
5. 近著紹介
6. 事務局から

1. 理事会報告

○第117回理事会

日 時：2006年9月30日(土)14:00～17:00
場 所：上智大学2号館8階 2-815b会議室
出席者：遅野井(理事長)、浅香、飯島、清水、
鈴木、高橋、谷、辻、恒川、畑、幡
谷、村上(書記)
欠席者：宇佐見

<報告事項>

(1)事務局・会計報告

- ・会費納入は順調で、9月25日時点で323万3000円と昨年度全体の納入額を上回った。
- ・第27回定期大会の収支決算は、1件未了事項があり終了していないが、約40万円の赤字となり次年度への繰越しとなる。
- ・地域研究学会連絡協議会への分担金として5000円(2年分)を支出した。

(2)研究部会報告

- ・東日本と中部日本は12月16日(土)、西日本は12月9日(土)に研究部会を開催する。会場借り上げ費の補助を確認した。
- ・研究部会と同じ内容の発表を定期大会で行った例があったので、定期大会のプログラム作成の際に注意することを確認した。
- ・春の研究部会は修士論文・博士論文の発表の場となり、発表者数が増加する傾向にあるが、会員の発表を優先する、発表時間の

短縮など工夫をすることで対処することとした。非会員の発表は、定期大会、研究部会とも、原則として入会申請を条件とすることを改めて確認した。

- (3)年報第27号の編集方針：論文の依頼はせず、定期大会の講演、書評や特定のテーマについての研究動向の掲載を検討している。印刷・製本は第26号と同じ業者に引き続き依頼する。
- (4)会報第90号を発行。91号は11月20日頃発行予定で、原稿締め切りは10月20日とする。
- (5)来年のCELAOソウル大会、FIEALCマカオ大会への会員の参加を募ることを確認した。
- (6)第20期日本学術会議の分野別委員会の中に地域研究委員会が設置され、地域研究学会連絡協議会(10月22日開催予定)との協力のあり方について今後、協議することになる。9月28日第一回地域研究委員会が開催された。同委員長の要請を受け、ラテン・アメリカ政経学会とともに推薦した本学会会員は残念ながら連携会員の選考から漏れた。
- (7)HP上の案内については、会員の所属する機関が主催するものは自動的に掲載し、その他は理事長と相談の上決定することを確認した。

<審議事項>

- (1)新入会4名、退会1名を承認した。
- (2)事務局に送られてくる会員の著作等業績について、これまで寄贈図書を受け入れていた地域研究企画交流センターの廃止を機に、今後の扱いを改めて審議した。状況の変化により業績の現物を保存する必要性は少なくなったと判断し、今後は、現物の確認を経て書誌情報を会報に掲載したことでその役割は終わったものとみなし、研究動向記事の執筆などに有効活用したうえで処分することとし、この取り扱いの変更を、会報を通じて会員に周知することとした。

- (3)韓国ラテンアメリカ学会(LASAK)からの交流の申し入れについて、先方に対し、交流に際しどのような研究テーマが考えられるかを照会することとした。
- (4)南山大学にて開催される次期定期大会実行委員会の構成について、加藤隆浩会員を委員長とし、浅香幸枝、牛田千鶴、安原毅の各会員(いずれも南山大学)の他、中部地域の大学から4名を選出し、計8名とすることを承認した。学会より50万円の大会補助を承認した。
- (5)理事選挙規則の改正に関し、選挙管理委員会より提出された答申を審議し、次のように決議した。
- ・郵便投票制度実施の是非：投票率の向上などの点から、郵便投票制度を維持することが望ましい、とする答申通りとする。
 - ・選挙権・被選挙権：会費納入の有無による選挙権・被選挙権の制限は、会費滞納者に対するペナルティーという点では前理事会から会則に沿って処分を厳正化していること、被選挙権を意図的に放棄する手段として用いられる場合が少なくないこと鑑み、理事選挙規則第3条から「実施年度の1月末までに会費を完納した者」を削除すべきである、とする答申通りとする。
 - ・辞退要件(選挙細則)：答申第1項の「理事5期経験者および理事長2期経験者」という要件に関し、「および同等の経験を認められる者」と文言を追加する。第2項については、「長期国外滞在、療養・入院、その他やむを得ない理由で理事職務遂行が不可能・困難であると認められる者」とし、公的に証明ができる場合はそれを理由書に添付することが望ましい、といった程度にとどめることが適切である。辞退承認の権限を理事会に委譲するとの答申については、現行のままが望ましい。
 - ・関連して答申された顧問制度の廃止：学会発足後一度も機能したことがないことから、答申通り廃止することとし、選挙規則とともに会則から削除する。また、これを機に現状に合わせ常任理事に関する条項を見直し、理事という表現のみに会則を改正する。
 - ・以上の規則変更に伴う具体的文言については、事務局で会則、選挙規則、選挙細則の関連条項について新旧対照表を準備し、次回の理事会で改めて審議する。なお6名連記による票の分散の問題は、様子を見るこ

ととした。

- (6)次回理事会は2月3日(土)午後2時より、東京大学(駒場)で開催される。

2. 第28回定期大会開催について

第28回定期大会は2007年6月2日(土)、3日(日)に南山大学名古屋キャンパスで開催致します。発表を希望する方は、2007年1月31日(必着)までに、氏名、所属、パネル、個人発表の別、発表テーマを明記の上、以下にお申込ください。できるだけe-mailでの送付をお願い致します。

非会員の場合は報告申し込みと同時に入会申し込みが必要です。

あて先：〒489-0863 瀬戸市せいれい町27
南山大学総合政策学部
浅香幸枝気付
日本ラテンアメリカ学会
第28回大会実行委員会

e-mail：asakass@ps.nanzan-u.ac.jp(大学)
asaka-stella@hkg.odn.ne.jp(自宅)
迅速な処理のためにも、大学と自宅2カ所にお送りください。

また、シンポジウム案および招聘講演者の候補などがありましたらふるってご提案ください。なお、こちらについては12月15日までに浅香実行委員までお寄せください。

3. 研究部会開催のお知らせ

以下のとおり各研究部会を開催いたします。多くの会員のご参加をお願いいたします。

○東日本研究部会

日時：12月16日(土)13:30~17:30

場所：上智大学11号館4階 11-405教室

共通テーマ「ラテンアメリカ政治のいま」

浦部浩之(獨協大学)：左傾化するラテンアメリカのなかでのチリ政治-コンサルタシオン政権の左派性と持続性

後藤政子(神奈川大学)：ポストカストロ体制をどのように考えるか

坂口安紀(アジア経済研究所)：ベネズエラの政治情勢-12月大統領選挙を中心に

新木秀和(神奈川大学):大統領選挙に見る
エクアドル情勢
遅野井茂雄(筑波大学):先住民政権の1年
—「ポリビアの再興」はどこまで進んだか
連絡先:畑恵子 hata@waseda.jp

○ 中部日本研究部会

日時:12月16日(土) 13:00~17:00
場所:名古屋大学大学院国際開発研究科
第1会議室(8階)

報告者および題目:

寺澤宏美(名古屋大学大学院博士後期課程)
「在日南米人のメディア利用による情報収集—愛知県内在住のペルー人を中心に—」
安原毅(南山大学)
「輸出促進政策の比較:メキシコとブラジル」

連絡先:浅香幸枝

e-mail: asakass@ps.nanzan-u.ac.jp(大学)
asaka-stella@hkg.odn.ne.jp(自宅)

○ 西日本研究部会

西日本研究部会

日時:12月9日(土)14:00~17:30

場所:京都外国語大学京都ラテンアメリカ研
究所(IELAK)(国際交流会館5階)

報告者および題目:

真鍋周三(兵庫県立大学)
「植民地時代ペルーにおけるワンカベリカ
水銀鉱山と水銀汚染問題—植民地時代前半期—」

米田恵子(Centro de Investigaciones y
Estudios Superiores en Antropología
Social, México)

「『第二クアウティンチャン絵図』(メキシ
コ、プエブラ州、16世紀)に記された神話
と歴史」

小林致広(神戸市外国語大学)

「偶像摘発キャンペーンとメキシコ中央部
の先住民社会—1530年代末異端審問記録
の分析から—」

桜井三枝子(大阪経済大学)

「'90年代以降、ラ米先住民女性に関する
人類学的研究の動向」

なお、今回の西日本研究部会は「SECILA(イ
ベリア・ラテンアメリカ文化研究会)」との合同
研究会です。

連絡先:辻 豊治 t_tsuji@kufs.ac.jp
京都ラテンアメリカ研究所
TEL 075-312-3388

4. 学術交流

○ CELAO (ラテンアメリカ研究アジア・オ
セアニア審議会) 第2回大会のお知らせ

CELAO (Consejo de Estudios
Latinoamericanos de Asia y Oceanía, Latin
American Studies Council of Asia and
Oceania) の第2回大会が、2007年6月21日
~23日に韓国で開催されます。会場はソウル
の国際会議場 (COEX - Convention and
Exhibition) です。

CELAOは、2003年9月に大阪で開催され
たFIEALC 2003 OSAKA (ラテンアメリ
カ・カリブ海研究国際連盟第11回大会)に際
して、アジアとオセアニアのラテンアメリカ
研究者間の連携のために設立された国際学会
です。第1回大会は、2005年7月14日~16日
にオーストラリアのラトロブ大学のBarry
Carr教授を実行委員長として、メルボルンで
開かれました。大会は2年ごとに開催される
ことになっており、第2回大会の実行委員長
は、韓国ラテンアメリカ学会 (LASAK) の
Kim Won-ho会長 (韓国国際経済政策研究
所・KIEP) です。

大会ホームページは<http://www.lasak.or.kr/CELAO2007.htm>で、ここから大会参加
申込書をダウンロードすることができます。
すべての連絡は、LASAK国際担当副会長の
Kim Myung-Hye氏 (celao07@gmail.com)
宛に送ることになっています。

CELAO第2回大会では、ラテンアメリカ研
究に関する人文社会科学のどのようなトピッ
クについても、個人発表あるいは分科会とし
て申し込むことができます。300語以内のア
ブストラクトを、4~6のキーワードとともに、
2006年12月15日までに提出することが必要
です。発表論文の提出期限は2007年5月31日、
使用言語はスペイン語と英語です。

アジア・オセアニア地域におけるラテンア
メリカ研究の連携と発展のために、日本ラテ
ンアメリカ学会からも多数の会員が参加する
ことを希望します。

○ FIEALC (ラテンアメリカ・カリブ海研究
国際連盟) 第13回大会のお知らせ

2007年9月25日~28日、マカオにて
FIEALC第13回大会が開催されます。詳細は、
Webサイト<http://www.fiealc2007.org>をご
覧ください。(小泉潤二 大阪大学、日本
FIEALC/CELAO委員会 (CJFC) 委員長)

5. 近著紹介

石橋純『太鼓歌に耳をかせーカリブの港町の「黒人」文化運動とベネズエラ民主政治』

松籟社、2005年、574頁。

二村久則（名古屋大学）

著者によれば本書は、ベネズエラのカリブ海に面した都市プエルトカペーゴを舞台に、その旧市街に位置し、かつて「ならずもの街」と呼ばれたサンミジャンというバリオ、すなわち都市下層の地域社会に住む若者たちが、地域に伝わる祝祭を通じて伝統的文化を復興することによって、草の根の民主政治を実践し自尊心を構築する軌跡を描いた物語である。素直に読めば確かにその通りで、額面どおりに受け取っただけでも、本書は優れたエスノヒストリーであり、かつ、その若者たちのカリスマ的リーダーであるヘルマン・ビジャヌエバという人物を活写した伝記でもある。

しかし、博士学位論文をもとに徹底的に改稿して一般向けにしたというこの書籍はそう単純なものではない。時にベネズエラの政治・経済・社会という大状況に駆け上がってみせたかと思うと、そこからサンミジャン地区の人間関係という極小状況を俯瞰し、ここ半世紀間のこの国の政治・経済過程がいかに個々の人々の暮らしと関わっているかをあぶり出してみせる。あるいは、政治がいかに文化的表象を用いて人心を操作しようとするのか、それに対して民衆がいかに主体的に対抗しようとするのかを、政治と文化という大雑把な枠組みではなく、「民俗文化」と「民衆文化」という概念を駆使して描いてみせる。さらに今度は、サンミジャン地区に隣接する油脂工場の立ち退きをめぐる闘争を叙述する過程で、地方の一工場の盛衰を通じて、石油に依存したベネズエラの近代化、時代を下って新自由主義経済政策下でのマクロ経済的状况などを浮き彫りにする。著者は、マクロとミクロ、全体と個、社会と人間、組織と個人のあいだを自在に行き来し、そのなかで浮上してくる問題群を掘り上げ、いったん読者に投げかけたのちに、それらを鮮やかに捌いてゆく。論理は明快で文体は読みやすいが、争点となりそうなところには細かい脚注をつけ、学術書としての防備も怠らない。

構成を紹介しておこう。本書は、全Ⅲ部、13の章から成り立っている。「物語をより

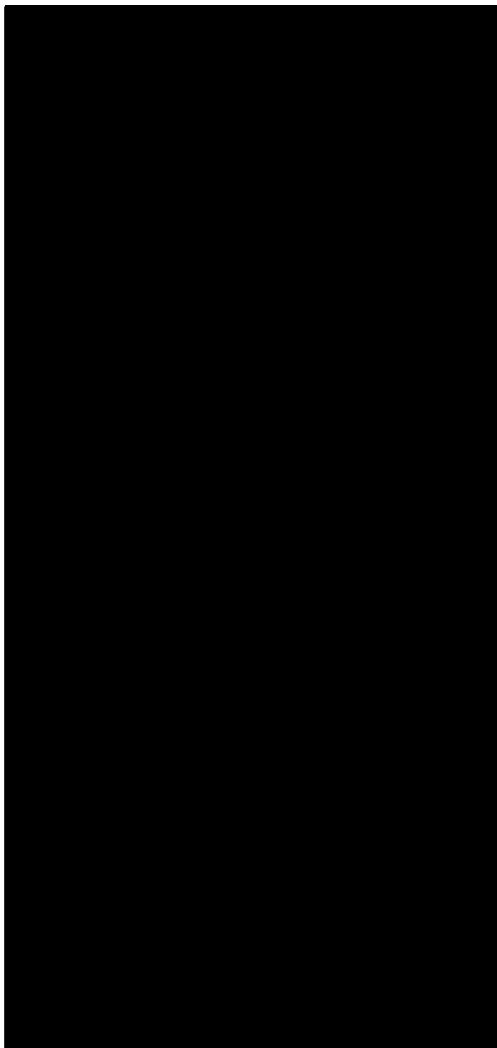
深く理解するための基礎情報」であるとされている第Ⅰ部は、第1章で人種と民族に関する基礎的というより根源的な問題提起がなされ、第2章では、物語の舞台となるプエルトカペーゴ市の経済史的成立過程と、「川むこう」と呼ばれたバリオに属するサンミジャン地区についての基本情報が説明されている。第3章から第7章までを含む第Ⅱ部が本書の中心部分で、冒頭に名前を挙げたビジャヌエバのリーダーシップのもと、サンミジャンの地域住民がいかに地域の伝統文化である「太鼓歌の宴(タンボール)」を復興させ、サンミジャンの住民であることに誇りを持つにいたったかが詳細に物語られている。第Ⅲ部では、まず第8章と第9章で近現代ベネズエラの政治経済史、および思想史という大状況が説明された後、第9章から第12章で舞台を再びサンミジャンに戻して、二つの事件、すなわち油脂工場立ち退き闘争と太鼓会館建設問題を取り上げ、それらを通じてビジャヌエバを取り巻くサンミジャン内外の人々の人間関係の変遷、そして地域文化復興運動そのものの変容について語られる。終章は「周縁における民主主義とアイデンティティ構築」と題され、サンミジャン文化運動の意義と限界が、ベネズエラ社会の大状況の中に位置づけられる。

書名にある「太鼓歌(タンボール)」になぞらえて、各章のはじめには「前奏」、部と部のあいだには「間奏」、そして最後には「後奏」と題する短い考察が挿入されており、ここで読者は一息入れて、著者の率直な感想や思い入れに触れることができる。

100ページ近くに及ぶ巻末の詳細をきわめた資料、縦書きの本文に対して脚注を横書きにして読みやすくしたこと、添付された100点以上の写真など、構成、レイアウトもよく工夫されており、内容、体裁ともに魅力的で、文字通り「太鼓(タンボール)の音」が行間から聞こえてきそうな本である。ベネズエラ研究者のみならず、ラテンアメリカに興味を持つすべての人に薦めたい。

6. 事務局から

I. 会員関係



II. 会員の業績など(事務局宛送付分)

- 『イペロアメリカ研究』第XXVIII巻第1号
2006年度前期(通巻54号)
上智大学イペロアメリカ研究所
- 今井圭子『アルゼンチン主要紙にみる日本認識』上智大学イペロアメリカ研究所(ラテンアメリカ・モノグラフシリーズLAMS) No.15、2006年
- 浦和幹男『教養スペイン語の語彙に関する5都市の比較研究—マドリード、メキシコ・シテ、サンタフェ・デ・ボゴタ、リマ、サンティアゴ・デ・チレー』拓殖大学言語文化研究所(拓殖大学研究叢書、人文科学13)、2006年

- 調子千紗『ポルトガル語になった「デカセギ(Decasségui)」—ブラジル国内メディア分析によるブラジル社会のデカセギ観変遷の考察—』上智大学イペロアメリカ研究所(ラテンアメリカ研究No.30)、2006年10月

III. 日本学術会議報告

第20期日本学術会議は会員210名に加え、連携会員1990名の任命をもって本格的にスタートしました。30の分野別委員会の中に地域研究委員会(委員長 油井大三郎会員)が新設されたことは、学術会議において地域研究が学問分野として認知されたということの意味しており、画期的なことと言えます。そのもとに地域研究基盤整備、国際地域開発研究、地域情報、人類学、人文・経済地理と地域教育、地球環境変化の人的次元の研究計画の6分科会が設けられ、活動が開始されることになりました。9月28日第一回地域研究基盤整備分科会が開かれ、委員長に小杉泰会員(京都大学アジア・アフリカ地域研究科)、副委員長に地域研究コンソーシアム会長の家田修連携会員(北海道大学スラブ研究センター)、幹事に地域研究会連絡協議会事務局長の加藤晋章連携会員(大東文化大学)を選出しました。今後2年間に、日本における地域研究の研究教育体制の整備発展のあり方について提言をまとめ、必要なシンポジウム等を実施することになっています。

今期からメンバー選出が自律的となり、会員と連携会員は学会を代表するものではなくりましたが、当学会も加盟している地域研究のコンソーシアムと連絡協議会の代表が地域研究基盤整備分科会の役員となったことから明らかなように、とくに同分科会の活動において学会との協力関係は不可分です。当学会理事会としても、連絡協議会等を通じて地域研究委員会の活動に適切に対応する所存ではありますが、シンポジウムや課題別委員会の設置等において、会員の皆様の協力を仰ぐことがございます。また日本の地域研究、とくにラテンアメリカ研究の推進・拡充にあたって、皆様のお知恵を拝借することが必要となっております。ご意見、ご提案等ありましたら、是非とも、事務局までお寄せください。
(遅野井茂雄 地域研究基盤整備分科会)

**事務局にお送りいただいた業績の
取扱変更のお知らせ**

当学会では、会員の皆様からお送りいただいた業績の書誌情報を、事務局で現物を確認したうえで会報に掲載しています。そしてこれまでは、確認済みの業績を、地域研究企画交流センターを通じ国立民族学博物館附属図書館に寄贈し保存してきました。ところが2006年3月に同センターは廃止され、同年4月京都大学に新規に設置された地域研究統合情報センターにその事業が継承されました。そこで先の理事会で検討した結果、情報の電子化・電子ジャーナルの普及等の社会的変化により、お送りいただいた業績の現物を保存することの必要性は以前より小さくなったと判断し、これを機に、次のような処置をとることとしました。今後は、現物確認を経て書誌情報を会報に掲載したことで、現物は役割を終えたものとみなし、保管はしないことにいたします。事務局は研究動向記事の執筆資料に提供するなど有効活用を図ったうえで、古いものから処分していきます。業績の返送を希望する会員は、返送先を表書きし料金分の切手を貼付した返送用封筒を同封して下されば現物確認後に返送いたします。

会費納入のお願い

2006年度の会費を未納の方はお納め願います。郵便振替用紙が必要な方はご請求ください。なお会則（第11条）によると、会費を連続して2年間、無届にて滞納した場合は、理事会の議決をもって除名することがあります。2005年度分までに未納がある会員は、未納分を含めてお納め願います。

郵便口座番号：00140-7-482043
加入者名：日本ラテンアメリカ学会

<お詫びと訂正>

会報第90号20頁記載の武田由紀子会員の所属が誤っておりました。お詫びの上、以下に訂正いたします。

(誤) (神戸市外国語大学大学院) →

(正) (神戸市外国語大学)

編集後記

万世節を迎えると、今年も残りわずかだという実感がわく。日本ではカボチャのハロウィーンが定着してきた。ラテンアメリカ諸国にもこの傾向はみられる。大都市では10月末には魔女に仮装した子供たちがあちこちで見られるようになり、関連イベントも催されるようになってきた。それでも「死者の日」といえば今もあのメキシコの骸骨の砂糖菓子と蠟燭が思い出される。画一化された消費文化が拡大するなか、ラテンアメリカの伝統や習慣はどのように受け継がれてゆくのだろうか。

11月の声をきけばダウンタウンの商店街では一斉にクリスマス用品が店頭に並ぶ。12月に入れば今度は「ボサーダ」や「ノベナ」など、国ごとに様相は異なるが、クリスマスを迎える行事が続く。ラテンアメリカに出張する、あるいは仕事関連のやりとりをするには年内は実質あと1ヶ月しかない。何事につけ、締め切りの文字がちらつくようになる。そんな気ぜわしさは日本の暦でも同じだ。お年玉つき年賀葉書の売り出しが始まるだけでなくカウントダウンの心境になってくる。

だが、文化、学術面での活動や行事は秋が本番。カレンダーの残り枚数を数えるのはやめて実りの秋を楽しもう。学会研究部会にも是非積極的なご参加を。(幡谷則子)

No.91

2006年11月20日発行

学会事務局

筑波大学大学院人文社会科学科研究科
現代文化・公共政策専攻
遅野井茂雄研究室

〒305-8571 つくば市天王台1-1-1

TEL 029-853-6534

FAX 029-853-6502

E-mail: osonoi@social.tsukuba.ac.jp